

- 本県のトルコギキョウは生産額で全国3位の主産県で、秋出し栽培においては主要産地に位置付けられているが、**出荷率の低下が問題**となっており、高品質で安定した**生産技術の確立が急務**となっている。
- RTF苗を利用した栽培技術の本県の状況に応じた形で確立し普及させるため、**3.0節以上の大苗定植と土壌水分管理の技術を確立**し、県内産地へ広く普及を図った。
- その結果、**大苗定植の技術が徐々に普及拡大**しつつある。

具体的な成果

普及指導員の活動

1 大苗定植の実用性

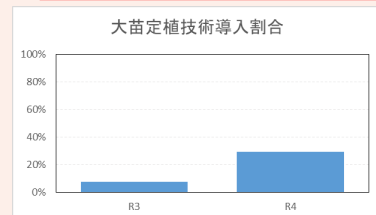
- 大苗定植において従来の2.5節苗定植と概ね同等の品質となった。一部ほ場で、切花長が長く、品質向上効果が見られた。
- 品質向上効果が認められたほ場では、定植直後の水分管理の重要性が明らかとなり、その解明が課題として残った。

令和4年

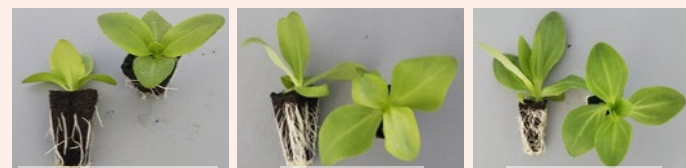
- 大苗を用いた秋出しトルコギキョウの栽培技術の普及に向け、**育苗技術の検討と本圃での安定生産**のため現地の状況を踏まえ、**福岡オリジナルのマニュアル**を検討。

2 大苗定植技術の導入

■大苗定植技術の導入割合(面積率)



推進前に比べ、約4倍の29%に増加。



既存技術 2.5節苗

大苗 3.0節

抽台苗 RTF

令和4年

- 各産地で実証展示ほを設置 (5カ所) すると同時に現地生産者等との綿密な連携によって、技術の導入推進を行った。定植後の生育調査、切り花形質調査と結果の分析から、改善点を明らかにした。

令和4年

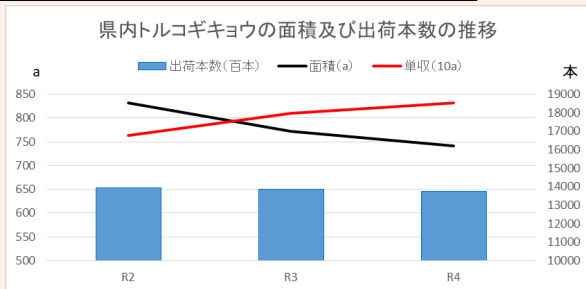
- マーケットインを念頭に生産、販売体制づくりを推進するため、JA、市場関係者との意見交換を実施した。

普及指導員だからできたこと

- ・ 専門技術を有し、現地の生産状況を把握し、他の関連機関と情報共有している普及指導員だからこそ、**新技術の導入を推進し、福岡県に適した栽培方法の確立が可能であった。**

- ・ JA、市場関係者、研究機関、県行政の関係者との交流を進め、多方面からの意見収集を通じて、新技術の導入と実証について合意形成が図られ、**関係機関一体となって、新技術を確立し、普及拡大が期待される体制を構築することができた。**

3 単位面積当たりの収量が向上



4 栽培実証の状況

- 大苗定植技術は、より詳細な水分管理を解明するため**久留米・飯塚普及センター管内(県内主要産地2カ所)の施設栽培において調査中**である。

福岡県

大苗を用いた秋出しトルコギキョウの栽培技術の普及

活動期間：令和4年～5年度

1. 取組の背景

福岡県は、トルコギキョウの生産面積が約40ha、生産額は全国3位の生産県である。特に10～12月にかけて出荷する秋出し栽培においては主要産地に位置付けられている。しかし、担い手の高齢化等で生産面積、生産量は減少傾向にあり、ニーズに合わせた品種の選定等、技術の複雑化、高度化によって出荷率の低下が課題となっており、高品質で安定した生産技術の確立が急務となっている。

RTF苗を利用した栽培体系は、熊本県において、9月定植、12月出荷の作型で導入され、生育の揃いや品質向上効果があり普及している。一方、福岡県は、定植時期が熊本県よりも高温となる7月下旬～8月中旬が中心であり、活着までの水管理が難しく、RTF苗では品質が低下しやすい。これまで、県内ではより活着しやすい小苗（2.5節苗）での定植が推奨されてきたが、県内の先進産地では、本技術を応用し大苗（3.0節）を定植し、定植後の水管理を厳密に制御することで、品質が向上し、さらに生育揃いが良くなった事例が出てきた。

そこで、秋出しトルコギキョウの出荷率向上と安定生産を目的とし、3.0節以上の大苗と厳密な水分管理を組み合わせ、大苗を用いた秋出しトルコギキョウの栽培技術として県内産地へ広く普及を図る取組みを実施した（図1）。



図1 大苗及びRTF苗の姿

2. 活動内容（詳細）

生産体制・技術確立支援事業（令和4～5年度）を活用し、普及指導員が中心となって「大苗を用いた秋出しトルコギキョウの栽培技術の確立・普及」に取り組んでいる。具体的には、実証展示圃の設置や技術指導、現地検討会、現地実証試験の設計、実績検討会、市場等との意見交換会などを実施し、出荷率の向上、安定生産技術の確立と推進に取り組んだ。

■令和4年度

・農業革新支援専門員を中心に、普及指導センター、園芸振興課、農林業総合試験場、JA全農ふくれんによるプロジェクトチームを結成した。

- ・プロジェクト会議等で大苗定植の技術について整理し、普及指導員の理解を深め、技術導入の推進を図ると同時に、県内で秋出しトルコギキョウの生産が多い、福岡、北筑前、久留米、飯塚、田川の5普及指導センター管内に実証圃を設置した。併せて、大苗定植技術のポイントとなる定植直後の水分管理について調査を実施した。本圃における実証とこれまでの技術の蓄積から、秋出しトルコギキョウの栽培マニュアルとなる「秋出しトルコギキョウの栽培の手引き」作成のための検討を重ねている。次年度は、より詳細な土壌水分調査を実施することで、大苗定植による秋出しトルコギキョウ栽培の手引きを作成する。

- ・プロジェクトチーム員である JA 全農ふくれん主催で、県内各産地の普及指導員、JA 営農指導員を招集し、主要取引市場等との意見交換を実施した。

3. 具体的な成果（詳細）

- ・県内5カ所で実施した実証圃では、4カ所で、既存技術との差は見られなかったものの、1カ所において、主茎長や切り花長が長く、品質の向上が見られた。

- ・実証圃の結果から、産地によって定植後の水分管理が異なり、優良な事例においては、定植直後のかん水量及び回数を多くし、例年よりも細やかな水分管理を実施したことが明らかになった。

- ・普及指導員が率先して技術導入を推進したことで、一部地域で実施されてきた大苗定植の技術の導入面積が増加してきている（図2）。

- ・大苗定植技術の導入に伴い、秋出しトルコギキョウにおける単収（10a 当たりの出荷本数）が向上してきており、生産者数や生産面積が減少するなか、共販出荷量が概ね維持されている（図3）。

- ・プロジェクト会議において大苗定植技術に関する要点を整理し、県内各産地の事例等からの「秋出しトルコギキョウ栽培の手引き」について、検討を実施したことで、普及指導員の理解が深まった。完成・配布は次年度となる見込み。

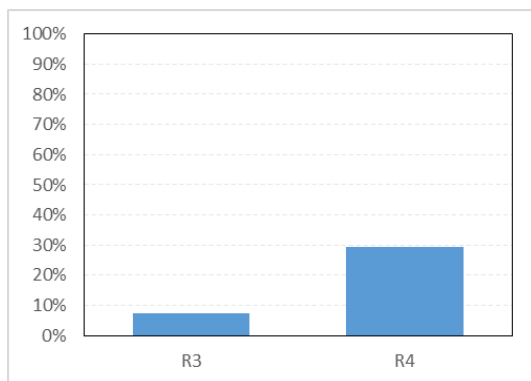


図2 大苗定植技術の導入割合

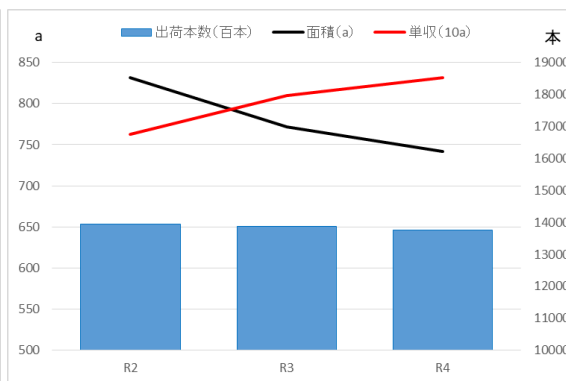


図3 面積及び出荷本数の推移

4. 農家等からの評価・コメント(A氏)

秋出しトルコギキョウの大苗定植を実証展示しました。R T F 苗の取り組みなど他県で実施されていたため興味はありましたが、実証したのは今回が初めてです。切り花長等の品質、生育揃いが向上し、短期間に集中して収穫できた点が良かったです。

品種間差の確認やより効果的なかん水管理など今後の調査や現地における取組みを注視していきたいです。

5. 普及指導員のコメント(福岡普及指導センター・古屋主任技師)

当管内は、トルコギキョウを始め多様な花きの産地で、県内市場を始め、関西～関東市場まで出荷しています。これまで秋出しトルコギキョウの安定生産のため、種子冷蔵や冷房育苗など様々な取組みを実施してきました。本事業により新たな生産技術が導入され、品種構成を中心とした技術確立から、基本的な技術についても再注目されるようになり、栽培技術の向上、安定生産への意欲も高まっています。

管内は秋出しトルコギキョウを含め草花類を組合わせた複合経営が主流です。近年、秋出しトルコギキョウの単価が安定しているなか、安定生産技術が確立されることで、経営の安定が図れるようになりました。県内他産地の状況も踏まえ、安定した技術となること、福岡県としての秋出しトルコギキョウのブランド強化が期待されています。安定生産技術とともに、ブランド強化、産地の維持・発展を進めていきます。

6. 現状・今後の展開等

プロジェクトチーム内での技術の整理によって、実証圃の設置と同時に普及が図られ、導入面積は順調に増加してきている。今回の実証によって定植直後の水分管理が重要であることが明らかとなり、次年度詳細な調査・分析を実施することとしている。また、土壌水分管理技術の分析結果と併せてこれまでの栽培技術の蓄積から「栽培の手引き」を完成させる。「栽培の手引き」の活用、これまでの関係機関による連携を継続させることで、さらなる普及推進を図り、新たな担い手を確保すること共に産地の維持・発展につなげていく。